若越郷土研究　六十一巻一号

越前白山地区の「自在女」と「解雷ヶ清水」―伝承の特徴と語り継ぐ精神的素地―

塩瀬博子

はじめに

越前市白山地区には、国難を避け漂着した百済王の娘「自在女」[1]に因む伝説が伝わっている。この伝説は姫が尼となって上陸した越前海岸の「干飯崎（米ノ）」、そこから東の山を越えた地・「千合谷」にある「解雷ヶ清水」、そしてさらに東漸し永住したという白山地区の中心地・「二階堂」という地域に渡り、いわば点ではなく線として西から東に向かう地域一帯に言い伝えが広がっている。

地図1　越前市／越前町付近地図
（http://map.yahoo.co.jp より）

伝説内容は、以下のようである。神武天皇の御代に百済の姫が、東方に有縁の地があると知り、船に乗って越前海岸の干飯崎という浜に漂着した。姫は馬に乗り山を越えて東へと進み、途中湧水の奇跡を起こし、さらにその奥の二階堂に赴いて当地を開発し、稲作の作り方を教えるなど人々を安寧の生活へ導いたという。尼僧の守り神は土産神[2]として崇められるようになり、それが白山妙理大権現、今の二階堂にある白山神社だと伝わっている[3]。

このような類の話は「貴種流離譚」と言われ、『広辞苑』によると「説話類型の一。貴い家柄の英雄が本郷を離れて流浪し、苦難を動物や女性の助けなどで克服してゆく話」とある。上記の説明は男性を中心としたものであるが、女性の場合においても、これに類する王女漂着伝説は「うつぼ舟の話[4]」や『日本伝説体系』の第十二（四

国編[5]）／十三巻（北九州編[6]）などに見られる。これらの貴女流離譚を大別すると日本国内／国外から流れ着いた話に分類され、またその展開として

a　女性が助けられ、やがて奇跡（蚕飼や蚕産、病平癒など）を起こし尊敬され祀られる

b　女性が亡くなった後その地に良くないことが起こり、その霊が祀られ供養される

c　女性が身籠っていた子どもが地域の名士の始祖となる

という内容に分けられる。

当伝説はそのうちのaに位置づけられる。百済から海を渡って越前の海岸に来着したこの百済の姫の言い伝えは「全くの伝説であるから何ともいえないが[7]」とも書かれている。この伝説に関して、かつて明治四二年刊の『丹生郡誌』（福井県）の余録には「自在王女伝説を本文に収録しなかったが、それは全く信憑すべき事実がなく、荒唐無稽の説である[8]」と記述されていた。しかし杉原丈夫は「貴女流離」のなかでそれに対して異を唱え、「そのような伝説が何百年も語り継がれて来たことは、れっきとした一つの事実である。昔の人がいかに素朴であったとしても、よいかげんなデタラメをそのまま素直に信ずることはありえない。王女流離の伝説をたいした抵抗もなく受入れ、それを伝承していく精神的素地が郷土の人たちの中にあったのである。（後略）[9]」と反論している。

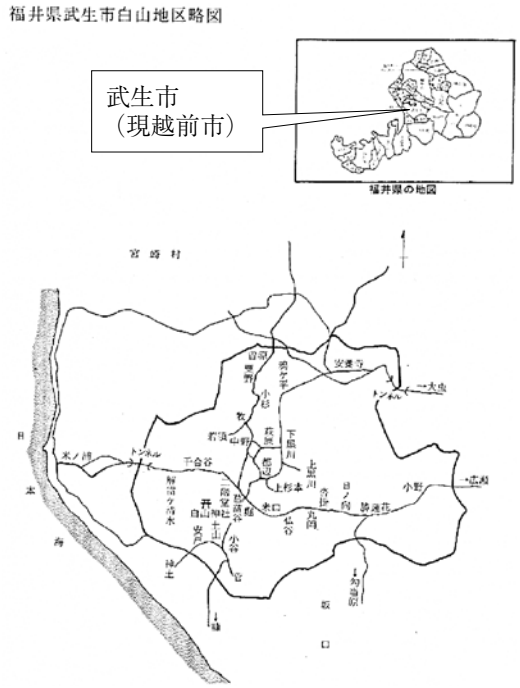
杉原が主張するのは史実と伝説の間で、史実ではないとしても人がそれを信じ語り続けたという、そのこと自体の重要性であった[10]。その論に立ち、「自在女」伝説のうち特に「解雷ヶ清水」に焦点を当て、伝説の特徴をとらえたうえで、なぜ地元の人が信じて語り伝え、一四〇〇年の長きの間例祭をとり行ってきたのか、またその精神的素地とは何であるのかを考えたい。

一　研究対象地の概況

先述したように自在姫の伝説においては、その足跡が三つの地域に渡っており、漂着地の「鰈崎（かれひざき）・干飯崎（かれい）（現在の米ノ）」、そこから山越えした「千合谷」の「解雷ヶ清水」、さらに東にある定住地「二階堂」である。米ノは越前町にあり、姫が奇跡を起こした「千合谷」「二階堂」のある白山地区は越前市に属する。

まず、当論文の主な伝説の舞台、白山（しらやま）地区から紹介をしよう。

【白山地区】越前国府のあった福井県越前市（旧武生市）の西端に位置し、二〇〇～五〇〇メートル級の山々に囲まれた盆地状の地形にあり、古くは「山干飯（がれい）」と呼ばれていた。現在の町名「白山」は明治二三年の市町村制実施に当たり、当時山干飯郷四八村の郷社、二階堂にある白山（はくさん）神社の名より名付けられた[11]。丘陵地や谷あいの小さな平野に現在二五の村々が散在しているが、この町は水と緑に恵まれ、日本の里百選に選ばれた。五四三世帯で一七三二人（二〇一五年七月一日現在）。当地区の生業は純農山村の形態であったが現在では兼業農家から非農家になり、地区外（越前・鯖江・福井市方面[12]）に勤務する住民が多い。



地図２　福井県武生市白山地区略図　（市町村合併前）
（武生市白山公民館『山千飯の暮らし』1891）より

【千合谷と解雷ヶ清水】白山地区の西にある地域で、姫が岩に杖を突いたら水が湧き出たといわれる解雷ヶ清水[13]がある所である。『白山村誌』によると、その名は谷間が数多くあるのでその数の多い事を「千」で表現し、合わせた「谷」として名付けたものではないかとされる。「解雷ヶ清水」には不動明王が祀られ、毎年七月七日に例祭が行われる。明治時代まで雨乞いの神様として、干天時は雨乞い相撲が終わる頃には必ず雨が降った[14]、という。二〇一五年九月一日現在、戸数は二二世帯、人口六五人で、ほとんどの世帯主が六五歳以上である。水汲み場の近くには一九九六年に建立された碑文が建っている。

《「碑文」内容》

解雷ヶ清水の由来

今から一千四百年以前の昔西暦五百七十年頃朝鮮の百済の国、都城が高句麗に攻められた時王女「自在女」が国の難を避けるため従者を従えて、干飯浦（現在の米ノ浦）に上陸し、安住の地を求めて、奥へ奥へと志向し、峻険なる六呂師峠を越えて山干飯の里、現在の「千合谷」へと向かった。途中途中従者たちは喉の渇きをおぼえ、清水を求めたがなかなか見つからず、これを見ていた自在姫が（中略）神仏を念じ水を求めていたところ、にわかに雲がかき曇り、雷雨とともに落雷があり、その響きとともに岩間からたちまち清い水がこんこんと湧き出て、従者の喉の渇きをいやすことが出来た。これが今に伝えられている解雷ヶ清水の起こりであり、それ以来、この清水は天王川の水源となり、現在に至っている。その後この解雷ヶ清水はいかなる旱魃のときでも清水が渇れることがなく、由緒深い霊地として社殿「不動明王」を建て、毎年七月七日には例祭を行い霊水として奉っている。また雨乞いの神様としても

写真１　解雷ヶ清水の碑文

慕われている。これが今に残る「自在姫伝説」の起こりであり、現在まで言い伝えられている。[15]

【二階堂】白山地区の中心とも言える地であり、その盆地を見下ろす丘上に、自在女に因むともいわれる総社「白山神社」が鎮座する。『角川地名大事典』[16]には「東方―北側丘陵に古墳がある。（中略）八世紀頃既にかなりの力のある豪族が住みついたと考えられる」とあり、神社の存在とあわせて古くから開けていた地と目される。

【米ノ（旧名「干飯浦」）】

越前町にある米ノは、西側日本海に面し背後は急峻な山が迫り、海と山に挟まれた地域である。同じく『角川地名大事典』によれば、この地は古くは王余魚（かれい）浦、干飯崎浦といわれていたが慶長十一年（一六〇六）に米ノ浦と改称した。五七三年高句麗使の船が破船し溺死者が出たという「沈船ヶ淵」の標柱が、淵を望む海岸に立っている。

二　自在女伝説に関する文献

考察の手掛かりとして、伝説の歴史的経過を見るために文献を年代順に見ていきたい。

（1）「自在女」「干飯浦（崎）」「千合谷（解雷ヶ清水）」「二階堂」の地名が現れる文書

【文献1】「白山宮（二階堂白山神社）縁起」

下記の文は、現在の神主小泉命（まこと）氏の祖父が家に代々伝わるという古文書を写し書きしたもので、氏がそれをコピーされたものを二〇一三年七月に筆者が戴いた。この文書の年代は不明だという。しかし、この文献中で米ノの呼称が「干飯浦」とあり、先述したように米ノは慶長十一（一六〇六）年に米ノ浦と改称がなされたことから一六〇六年以前と推定できる。最初に全文を記し、次にその訳を示す。[17]

白山宮縁起

越之前州丹生郡山干飯郷白山大権現者人皇元正天皇御宇養老元年創立□神武天皇御宇百濟國歎喜王有二一女三男長姉名二自在女一容色端正艶美具二四八相一被二忍辱衣一居二慈非室一及二十八歳一諸邦群王聞二其美一欲二競而迎レ之時舎郎國之奢首王年九十有二性質暴悪好二誇淫虐聞一自在女容色一遣レ使レ□レ之父其年老行肆不レ肯也又有二邊域一曰二狗郎国一王号二清浄一七寶豊饒主崇二仁慈一因欲冊之父便許諾也奢首王聞發レ憤擧レ兵責二百濟一清浄王合レ勢相戰殆及二数十年一奢首王逐亡□自自在念言害二於衆命一源起二於我一厥罪殃何以脱之哉於レ是發心出家薫修年深然後東方有二有縁地一飛二来斯國一始至レ之處謂二干飯浦一浦有二明神濱乃飯櫃之地一昔日自在女炊レ米之所也白水今尚漏出又東有二鞍掛竝龍峰一自在女乗二龍馬一来始爰居解レ鞍放之地也　又過二東方一入二干山中一有定坐観念観念之所也此地無レ水自在女時觀二浄水自然流出一謂二之解雷清水一也始天下晦然萬民疾疫治而不亡因聞三山中有二靈験貴尼一郷民威注二潔齋一求レ哀貴尼憐レ之一夕持念天下晴然如レ故民疾僉痊□因為二産神尊一稱二白山妙理大権現一異靈之聲聞二帝闕一重宣勅賜二正一位一（後略）

（訳）越前丹生郡山干飯郷白山大権現は元正天皇御宇の養老元年（七一七）の創立である。神武天皇の御宇、百済国の王、歎喜王に一女三男あり、長姉の名は自在女といった。容色端正でその艶美は四八相を具えており（中略）慈悲深かった。姫が十八歳になり、その美しさは諸国の王の知るところとなった。そんな時舎郎國の奢首王という九十余歳の性質暴悪で淫虐な王が、自在女の容色を聞き、他の王と競って姫を迎えようとした。使いを遣って結婚を迫ったが、姫の父は奢首王があまりに老齢と暴虐であったゆえにこれを断った。一方狗郎國という国に清浄という王がおり、国が豊かでその仁慈を崇められていたので、姫の父はその王の申し込みを承諾した。これを聞いた奢首王は怒り、兵を挙げて百済を攻めたので、清浄王も百済國を加勢して相戦ったが、この戦いは数十年に及んで続いた。奢首王は亡くなったが、姫は多数の衆命を死に至らしめた罪は自分にあると、出家して深く思いを巡らした後、東に有縁の地有りと聞き、飛来してこの地にこられた。姫が初めて着いた處を干飯浦といい、その浦には明神濱がある。また飯櫃の地というのは昔、自在女が米を炊いた所である。そこでは今なお白い水が出る。また東に鞍掛龍峰があるが、そこは自在女が馬の鞍を解いた所からその名がある。姫が東方を過ぎて山中に入り、場を定め座して一心に仏を念じた所がある。水がない所であったが、その時浄水が自然と流れ出したのでここを解雷ヶ清水という。その頃一帯の村に疾疫が流行り多くの人が苦しんでいたが、山中に霊験貴き尼僧がいることを聞き、助けを乞わんと自在女の元へやって来た。尼僧の一心の御祈祷で、病が治り人々は平和な暮らしができるようになった。そのため、尼僧の守り神を人々も崇拝しこれを「白山妙理大権現」と称すようになった。その異霊のあらたかなことは帝の聞くところとなり正一位を賜った。（後略）

【文献２】『越前地理指南』　越前藩（一六八五年）

この資料は幕府が越前国に命じて作らせたもので、作成に当り、絵図の資料を得るため村明細帳の形で上進された調査書では、という。群別村毎に寺社、城跡などが克明に記載されている。[18]

丹生郡

一　白山社アリ　　千合谷村

げらか清水と云御手洗アリ

一　白山社アリ　此辺惣社　　二階堂

本地阿弥陀　春日作

唐本大般若経アリ

【文献３】『越前志抄』坂野二蔵（一八一四年以前）

著者は一七四四年生まれ。和漢の学を修め、越前の地誌に関心を抱いて神社仏閣、郷村、山野海川などを調べて資料を収集していたが、一八一四年ににわかに世を去った。彼の学風は書斎での研究のみならず郷土を踏査し、古記録と古老の言を聞取りしており、民俗学の域にまで立ち入っている。[19]

（二階堂白山）

池田神主云、二階堂白山、今年開帳、参詣、縁起を聞。神武天皇の御宇、百済国の王、一女三男を生。長姉を自在女と名く。他国奢郎国王九十二歳にして荒淫也。欲娶之。不受、拘郎国の清浄王に妻す。奢郎国王怒て百済を攻。清浄王加勢して戦。奢郎国王亡す。自在女、我数多の人名を亡を哀み、尼と成。東に有縁の地有とて東へ赴き、カレのウラへ着。米をかしき候処有。カレの浦飯か浜有。今に白水流る。其頃疾病にて人命亡ふ。土人貴尼へ乞て祷り、国安し。故に神明にし、白山妙理大権現と云。庭闕へ達し、正一位を賜ふ。古老の伝、如此。（中略）二階堂小原氏曰、二階堂の白山は、百済国の自在女米ヶ浦に着。今に地名飯櫃あり。六呂師の上竜ヶ峯に馬を止玉ひし。此処に住玉はんと為玉へ供、心に入らさるゆへ、二階堂に飛給ひ座し由。千合谷川にて水想観を為れしとなん。其川を解雷（ゲライ）川と云となん。縁起あり。重ねて見すべしと云。

【文献4】『越前國名蹟考』井上翼章（一八一五年）

福井藩士が著した越前国の地誌。先行の地誌や史書からの引用に独自の考察が加えられている。

二階堂村　福井上領[20]（後略）

◎白山大権現　祭神伊弉冊尊（いざなぎのみこと）　○養老元年泰澄開基七堂伽藍の大坊にて社領七十五町坊舎數多有之 近郷四拾村の惣社たるが天正の兵火に罹りて焼亡せしに其後年暦を経て（後略）寺社縁起　○此邊の惣社本地阿彌陀唐本の大般若経あり　繪國記

塩瀬　越前白山地区の「自在女」と「解雷ヶ清水」

千合谷村（後略）

◎白山社　ケラカ清水と云御手洗あり　繪國記

【文献5】『若越寶鑑』渡辺市太郎（一八九九年）

日本名蹟図誌の第五編。郡ごとに名所旧跡を記し、本文は先行する地誌に基づく。

丹生郡[21]

米ノ浦　城崎村大字米ノ浦にあり、米浦は丹生郡の南部に位して日本海に臨める所なり、此地は古へ山干飯郷に属せしに依り干飯の浦とも称へけり、（中略）又、此浦に百済の皇女の旧蹟あり、伝へて曰く、神武天皇の御宇、百済国勤喜王に自在と称する美女あり、（中略）其後東方に有縁の地ありとて海を渡りて此浦に着船し岩間に閑栖す、云々故に今に着船の所を明神浜といい、米を炊きし所を飯櫃の地と云ふ、其地自在に関する旧跡少なからず、而して二階堂の白山社は自在を祀る所なりとぞ（後略）

【文献6】『福井県の伝説』鯖江女子師範学校編[22]（一九三六年）

白山神社（二階堂）

當社は伊弉那美尊を祀ってある。養老元年に泰澄大師の開いたもので（中略）近郷四拾村の惣社であったが天正の兵火にあって焼亡した。（中略）昔朝鮮の百済の人自在女と呼ぶ者が、當村に來て自己の守護神たる三像の佛を祀って白山大權現と稱へたのが、この白山神社の創めであるともいってゐる。

白山洞（とう）の池（二階堂）

白山神社の付近にある小池で、其の水は天王川の水源である解雷清水の水が池下を通って湧出るのであると傳へられ、旱魃に苦しむ時は此の池に雨乞いをした。

解雷ヶ清水（千合谷）

昔朝鮮の百齊の國に自在女といふ人があった。日本國に來て丹生郡城崎村の米の鰈崎に漂着して上陸した。それから次第に進んで、馬で米ノ峠を越えて千合谷の奥に出た。此の時杖で足下の岩を突いたら、忽ち清水が滾々として流れ出て下流の万民を養ふ様になった。この清水が解雷ヶ清水で今は天王川の水元となっている。自在女は更に進んで二階堂に出て住んだ。彼の住んだこの白山村を山干飯といった。（後略）

次にこれらの文献をまとめ、考察を行う。

（2）文献による考察

（1）の文献内容を事項別にまとめたものが表1である。表1から見出せることは以下である。

①解雷ヶ清水と白山神社の由来にかんして、記述に二通りあり、自在女の伝説を記さないもの（文献2、4）とそれを記すもの（文献1、3、5、6）である。特に文献6の「白山神社」の項では、神社の起源に泰澄大師と自在女の二通りの言い伝えを併記しており、諸説あることが示唆される。

②姫の善行はおもに水を湧出したことと、村人の病を治したことが中心に書かれている。

③姫の上陸地点・米ノ～解雷ヶ清水にかけて伝説に因む地名がある。

④文献6より解雷ヶ清水は位置する千合谷のみならず、白山地区全体の雨乞いの対象となっていた。

まず①から考察すると、文献4は文献2が元になっているとみられる。また、文献1、3、5の内容はほとんど同じで、文献1は現白山神社の神主を務める小泉家伝来の古文書である。文献3の著者は当時の神主から話を聞いているため、文献1と同内容になったと推測する。しかし著者坂野二蔵は古典研究のみならず実地に踏査し、古記録や古老に伝説を尋ねるフィールドワークを行っていた学者であることから、当時人々の間で伝承されていたことが記述されていると思われる。「古老の伝」とあり、文献1で書かれたことが後年同様な内容で伝えられていたことが窺える。

神社起源について、一九七八年の『白山村誌』にも双方の記述がある。[23] 白山神社の由来が霊峰白山を開いた泰澄大師[24]によるとするものと、自在女とする説である。前者について同村誌によると、白山村に白山神社は全部で六社あるが、それらの総本宮白山神社（在石川県）は泰澄が養老元年に開いて「白山比咩神」を祀り、その祭神の一人は菊理媛命である。菊理とは水泳の意で水の神であり（日本書紀　崇神天皇紀）、一方蚕の糸をくる「ククリ」で蚕の神ともいわれる。白山信仰は農民として最も大切な水の神、かつ養蚕の神であれば、この地でも氏神と勧請するのは当然としている。しかしもう一方で『白山神社縁起』によった自在女伝説の記述もあり、神

表１　文献記述一覧

		文献１ 白山宮縁起	文献２ 越前地理指南	文献３ 越前志抄	文献４ 越前國名蹟考	文献５ 若越寶鑑	文献６ 福井県の伝説
1	文献年代	～1800	1685	～1814	1815	1899	1936
2	伝説 記述	有（神武天皇御宇）		有（神武天皇の御宇）	有（神武天皇の御宇）	有（神武天皇の御宇）	有（養老元年）
3	自在女名記述	有		有		有	有
4	清水名記述と呼称／所以	有 解雷清水／有定坐觀念―自在女時觀二浄水自然流出一（原文）	有 げらか清水（御手洗）	有 解雷（げらい）川／水想観を為れし	有 ケラカ清水（御手洗）		有 解雷ヶ清水（今は天王川水元）／杖で（後略）、忽ち清水が滾々として流れ出て
5	千合谷 地名記述		有	有 （千合谷川）	有	有	有
6	自在女と郷民	御祈祷で病が治り		土人乞て祷り、国安し			
7	上陸地点記述と呼称	有 干飯浦	有	有 カレのウラ		有 米ノ浦干飯の浦	有 鰈崎
8	伝説に因む他の地名	鞍掛龍峰／明神濱／飯櫃		飯か浜／飯櫃／竜ヶ峯		明神浜／飯櫃	白山洞の池（解雷清水の水が池下を通って湧出る／雨乞い）
9	白山（神）社についての記述	有 養老元年（717）創立／尼僧の守り神→白山妙理大権現／異霊之聲聞帝闕重宣勅賜正一位（原文）	此辺惣社／本地弥陀　春日作／唐本大般若経アリ	有 故に（自在女を）神明に→白山妙理大権現／正一位を賜ふ	有 白山大権現／泰澄開基養老元年（717）祭神伊弉冊尊・七堂駈伽藍の大坊社領七十五町坊舎数多／天正兵火に焼亡／此邊の惣社本地阿彌陀唐本の大般若経あり寺社縁起	有 自在を祀る	有 ・養老元年に泰澄大師の開いたもの ・自在女―が自己の三尊の佛を祀って、白山大權現と称えた

社が勧請した菊理媛と自在女が重なり合っているようにも思われるが、はっきりとはわからない。

以上より神社由来には二通りの説があるが、清水には姫の名で一本化されていることから、自在女と関連付けて伝わってきたことがわかる。

②について①と関連するが、文献のほとんどが清水について触れ、六点のうち、五点に記載があり、由緒が自在女だというものは三点ある。当時の村落や人々にとって水の確保は死活問題であり、その発見は何よりも社会集団の維持や幸福に貢献するものであった。疾病の平癒も同じであり、その恩恵の念が姫と結びついて伝承を継続させたと考えられる。

③であるが、上陸地から解雷ヶ清水にかけて姫に因む地名が多いのは東進の跡付けと思われるが、両地の関係を示すものだろう。

④は白山地区の川や池などがすべて同清水を水源としていることを示し、「雨乞い」という語により、清水が地域全体で神聖視されていることがわかる。

それではこの伝説を地元の人たちはどのようにとらえているのだろうか。次に聞取りを記述する。

三　伝説と地域の人々／祭礼時の地元の人たち

（一）地元の人々の語り

【L氏】男性、一九五一年生まれ／【M氏】男性、一九四五年生まれ。L氏は当時区長、両氏とも千合谷在住、同出身

二〇一二年四月二八日聞取り

お二人にお会いしたのは解雷ヶ清水であった。海岸の干飯崎米ノ浦から県道十九号線で東に入るが、道路はいくつもの山や谷をカーブする。やがて干飯トンネルを越えると、写真2の大きな看板が目に入り、その右側に上り口がある。山地水田の間の細い山道を縫うように登っていくと、谷が少し開けたような地があり、そこが湧水地である。冷気を感じる霊地で、しきりに水の音がする。よく見ると泉を囲む山肌は岩盤で、岩のあちこちから水がしみ出し水源地に流れ込んでいる。水汲み場は石が組まれた湧水池の少し下にあり、そこから階段を登ると拝殿があり不動明王が祀られている。

写真2　清水入口看板

写真3　解雷ヶ清水

「最近は遠くから来る人が多いので下草刈りやごみ掃除など、管理が大変だ」とL氏は話す。以前は駐車場がなかったが、水汲みの便宜をはかり山間地水田の土手を拡げて整備をした。一九八六年に解雷ヶ清水の水が白山地区の飲雑用水事業の水源として提供されることになり、「ここの水は白山の生活用水になっている」と話された。祭礼は七月七日の七夕で、午前中に清掃をし、午後から神事が行われる。以前は地域の女性たちが銚子に花一輪を指してお参りに来ていたといい、昭和の初め頃まで境内で相撲が行われた事もあるという。[25]

なぜこの祭りを七夕に行うのかお聞きした所、「ここの水は近くの天王川（てんのう）の上流に合流する。つまり『あまのかわ』に流れている」と答えた。地名が祭礼日を表わしていたのである。[26]

L氏、M氏から解雷ヶ清水の祭礼日を伺ったので、後日七夕の日に再び千合谷を訪れた。

【祭礼時の地元の人たち】

二〇一二年七月七日聞取り

例祭は解雷ヶ清水不動明王祭と呼ばれているが、その日は昼から

大雨であった。二時前にテント下に村人が集まっている。祭事は二時～二時三五分まで執り行われ、その後直会となり三時に終了した。土砂降りであったが、村人が二〇人以上は参列されていたことから、全世帯の参加であると思われる。[27]回りの方々にお話を伺った。「福井地震（一九四八年）の時に岩がぞれた（ずれた）が、何ともなかった。水質や水自体は変化がなかった。それと今まで枯れたことがない」（男性）。

そしてもうお一人の女性は、解雷ヶ清水について、「この水を飲むときれいになる。だから心もきれいになる。夏は冷たくて、冬は温かい。大雨が降っても濁らない」（女性）と話された。[28]

三人目の方は次のように語られた。

昔は相撲もやっていた。それから女の人は銚子に花一輪挿して神殿の奥に並べたけど、今は二～三人くらい。

写真４　祭礼日の取水場と拝殿

写真５　神事と村の人々

前は浜（米ノ浦）の人が魚を背負ってここに寄って、この水で魚を冷やしてから町へ売りに行っていた。ここで冷やすと魚が傷まなかった。（女性　八二歳）

今日の車社会以前には、海岸地から中心地（武生市・現越前市）に行くには、何時間もかけ歩いて山越えをしなければならなかった。地元の人によると、海岸の米ノ浦から旧市内に行くのに徒歩で六時間以上かかるという。この女性の話を裏付ける記述が『白山村誌』に載せられている。[29]

米ノ、高左―等の浦々で漁獲せる鮮魚は自動車の出来るまでは皆、浜の女達（ボテ）が肴籠を肩にかつぎ、峠を越えて武生の魚市場や村々へ売り歩いたもので、特に市場への出荷は時期と肴の鮮度に厳しい制限があるので、浜から武生まで走り続けるのである。

それが真夏ともなれば、如何に走り続けても、遠い山坂の道の事でもあり、（中略）市場につくまでに、鮮魚は弱って売り物にならなかった。然るに、けらが清水の水に浸して運べば、決して肴が弱らないといふ霊験があると言ふので、ボテ達は汗にまみれつつ峠を越えると必ず此霊水（冷水）に三十分～一時間程浸して市場へと走ったものだ。

魚を運ぶ浦里のおかみさん達は「ぼてさん」と言われ、筆者の記憶では紺絣の上着とモンペに赤の前掛けをし、魚の入った大きな籠を背中に歩かれていたのを見かけたものであった。解雷ヶ清水は夫の獲ってきた魚を新鮮なうちに運ぼうとする海の女性達にも大切な

役目を果たしていたのである。

拝殿にて／水と自在女伝説

拝殿に上がって、村の代表の方々からもお話を伺った。自在女伝説について、「朝鮮の三国の戦争では、負けたら皆殺しにされる。それで自在女さんが海を渡ってここに着かれた」「村人が病にかかった時、（姫が）疫病を治したんやけど、解雷ヶ清水がその体を浄めた、って。そしてここは雨乞いの神さん。水が絶えることがない。」という話をされた。神主の小泉氏は「水系が中心になって村落ができた」と、歴史的な観点からこの村における解雷ヶ清水の位置づけをされた。前述のL氏は「観光地になると困る。水を汲みに来る人が増えたが、ごみも増えているし車のトラブルもある。ＮＨＫでも放映されたが、あまり喜んでいない。静かに守りたい」とその管理の難しさを語った。そして「ここは現代文明から外れていたから残ってきたと思う」と付け加えた。

地元の方々の話から

ここでは五～六人の方からお話を伺ったが、かつての祭礼時の様子、清水の特性や機能、彼らの生活とのかかわり、自在女、そして湧水地管理に対する葛藤など、水を巡る多くの事が語られていた。姫を「自在女さん」と呼称されたのを何度かお聞きしたが、地域の人々にとって姫が水源とともに今も生きており、その双方ともが大切な存在であることがわかる。また、地域全戸数が集まるこの例祭は水を巡る共同体の結びつきを固める場でもあり、水への感謝を皆で確認する場でもある。

（二）地元以外（姫の上陸地―米ノ）の人の語り

次に姫の上陸地である米ノの方からお話を伺う。

【N氏】男性、一九三七年生まれ、米ノ在住、同出身

二〇一三年四月八日、二〇一六年四月二四日聞取り

姫の上陸地と米ノと白山との関係

文献では姫の上陸地が干飯崎と記述されていたが、海浜の村と白山との関連を知るために聞取りを行った。氏は姫が着いたとされる干飯崎の近くに住まわれている。

まず海岸での姫の上陸地点・「明神浜」「神島」、河口の「飯櫃」の地へも案内を受けた。

彼は、白山神社の祭について次のように話した。「以前は、白山神社秋祭の神輿は、白山の人ではなく、米ノの人が担いでいた」―。意外な話に「どうしてですか」と尋ねると、懐かしそうに当時小中学生だった頃何度かこの祭りを見に行ったことを語ってくださった。明治時代迄は白山神社の御輿、提灯、幕、登旗は全部米ノ浦若連中と印され、旧暦九月十五日の例祭には米ノ浦の若連中が麻色に白のハッピ、白足袋の姿で御輿をかき、他の者がかつぐことは許されなかった[30]。それは「米ノの人たちが自在女一行を海岸から白山にお連れした、という言い伝えがあるから」と語った。

しかし米ノ浦若衆の白山神社への祭り参加は昭和三五年頃に止んでしまった。N氏はその理由を「（米ノの）若者が神輿を田んぼに放り投げ、ひっくり返してしまったから。」と話した。同じような

話は白山神社の神主・小泉命氏からもお聞きした。「昔神社の神輿は米ノの人しか担げなかったが、彼らがヤンチャをして神輿を倒したりしたらしい。（壊れてしまい）それで御神輿を止めた」[31]。

祭礼時の神輿の行列順について、N氏は古老の話を総合し次のように記している。

白山神社秋期祭礼時の神輿行列

表2　二階堂「白山大権現（山干飯惣社）」祭礼の神輿行列（中橋　二〇一三による）[32]

榊―道案内の神・猿田彦―白山宮大旗―祇園大旗―村々氏子旗―悪魔祓い―千合谷若者（額に一本角の獅子頭）の獅子神楽―若者ご馳走―米ノ浦若連中（麻色に白色の法被、白足袋）の神輿―御膳米口庄屋―神主

この表からも神社祭礼での米ノの人々の重要な位置づけがわかる。米ノ浦の人々が神輿を担ぐその理由について『越前町史』には神社の縁起によるとして、「二階堂白山神社神輿渡御（みこしとぎょ）に、米ノ浦若衆参加する理由は、米の浦明神浜に着岸せし自在を、二階堂迄輿で、ご案内せし故事あるためなり」[33]とあり、案内したのが海岸の若者だという言い伝えに触れている。また、村の言い伝えによると、自在女は舟三十艘と部下三百人、黄金千叺（かます）朱を積んで漂着したといい[34]、N氏は「これは正確な数字ではなく、数の多さを示す」と述べる。

氏はさらに、自在女が地域の人々に米作を教えたという伝説からは、当然土木や灌漑技術も伝えていたことを意味し、恐らくその人数の多さからそのような先進技術を持った人々がいた、と話す。

インタビューの最後に、自在女が米ノ浦若衆に先導されて千合谷の方へ上ったという山の場所を案内して頂いた。そこは谷が多い山地のなかでかなり傾斜のある上り斜面であった。

N氏の話から

姫たちが山越えできたのは浦の若者たちによるという伝説があり、山越えの上り道も特定され伝わっている。解雷ヶ清水と米ノ浦との関連について、『白山村誌』には、昭和の初め頃までその例祭に米の浦漁民達は毎年酒と鏡餅を持参して参拝したとあり[35]、姫の上陸地とされる海村の人々が白山村と深くかかわっていたことがわかる。

また、言い伝えのなかの姫一行の人数の多さは、様々な技術を有した渡来の人々の存在が示唆されている。

（三）三年後のある村人の語り

【O氏】男性、一九四七年生まれ、千合谷出身、同在住、現区長（二〇一五年）

二〇一二年七月七日・二〇一五年四月二八日聞取り

伝説と歴史の間

氏は一九九六年、「韓国へ自在女の伝説を確認に行った」という。筆者は二〇一二年祭礼時のその話に関心を持ち、三年後にさらにお

話を伺った。それは武生市（現越前市）と韓国との文化につながりがあるということで、市が計画したツアー旅行であった。参加者は一二～三人でO氏が団長を務められた。確認の結果をお聞きすると、「そのような姫の名前や話は見つけられなかった」とのことであった。

O氏は二〇一二年の解雷ヶ清水例祭の日の直会で「白山は文化の通り道で、行き着いた所が今立[36]などではないかと思う」と述べられていた。「潮の流れで人がこちらに流れて着きますから。今立の紙すきなんかも、韓国からもたらされたものではないかと思う。日本海に住んでいる人は自分たちの住んでいる所こそ表日本だと思っている」。この「今立」とは白山地区の東、越前市のさらに東進した地に位置し、継体天皇に因む数多くの伝承が残り、古来より和紙、織物等[37]の伝統工芸が盛んな先進地域である。その地に至る渡来人の通り道が白山地区だと言うのである。

伝承者のこだわり

O氏はかつて福井新聞の記事[38]―百済王女が村に残した命の水―の中で「解雷ヶ清水が市の水源として整備されるとき『できるだけ自然のままの姿を残しておきたいと思って周辺の整備は市に任せず、壮年会で自然石を組んだ』」と述べている。「こだわりがある。だから水源地も自然のままだし、そこに行く細い道も舗装していない。例祭の日にちも変えない。七月七日に決めている」

O氏の話から

水源地をはじめて訪れたとき、山中の泉という自然な印象を受けた。氏の話でコンクリートや人工物が極力使われていなかったことに改めて気付いた。「潮の流れで」「自分たちの住んでいる所こそ表日本だ」という氏の言には、この伝説の背景にある、ある種の北陸の人々の心情が表れている。

四　地元の人の語りからの考察

語りからわかったことは、(1)米ノと白山地区のつながり、(2)圧倒的水量の水が千合谷のみならず広い範囲の地域と人々の生活を担っており、大きな恩恵を与えていること、(3)(2)ゆえに大切に管理されていること、(4)自在女は「自在女さん」と呼ばれ、地域の人々に親近感を持って呼称されており、その背景に海からやって来た人々の足跡も示唆されていること、などがあげられる。

また、白山神社祭礼の神輿行列や神輿担ぎが自在女の東進伝説をもとにしていることも興味深いことである。小泉氏の説くように、清水の水系から地区の村落開発がなされたことから、その中心地での神社祭礼に自在女に関連の深い米ノの若者が優先された可能性もある。

さらに姫のことを韓国へ確かめに行ったというO氏の話から、結果は不明だったものの、人々の中に伝説が歴史との間に生きていることが窺われる。L氏、M氏も述べていたように、解雷ヶ清水の水は千合谷町住民が使用していたが、市が一九八六年に貯水槽を作り、白山地区全域の飲雑用水として提供された。氏によると、例祭には以前市長も呼んでいたという[39]。水源地の管理については、千合谷の住民全世帯によって行われている[40]。

祭礼日は今日では参加者の便宜をはかり、本来の期日を変更して行われることが多いが、ここでは七月七日の七夕と決めている。七夕とは「恐らく水の儀禮として農耕儀禮の主要な一節ではなかったか」[41]とあり、「水に関する伝承がきわめて多い。（中略）生命の水、蘇りの水の表象に基づく行事が存在していた可能性を考慮する必要がある」[42]とされている。

何故例祭日が七夕の日であるのだろうか。七夕の由来はもともと中国の織姫・牽牛伝説から始まり、やがて女性の技芸向上を願うために七月七日にその星に祈る祭り（乞巧奠）とされている。折口信夫は日本古有の棚機つ女が織女星信仰と融合を遂げたことを解いているが[43]、日本では七夕は水との関わりが深い日であり、この日には水浴びをしたり、井戸替えや道具を洗うなどの民俗行事が多く見られる。七夕の相撲行事も凶作や流行病の原因となる悪霊や死霊を水に流して清めるという、もともとの民俗に基づくもの[44]と思われ、これら水の関連行事と白山信仰、菊理媛（織姫との関連）、天王川（あまのかわ）の名称存在など様々な要素が幾重にも重なり絡み合っているようである。

しかし、例祭はこの日でなくてはならない、という地元の人々のこだわりは、行事の的を確実にとらえている。

まとめ

当伝承（含伝説）は、この地の風土―海流・海から近い位置・渡来の漂着者・近辺の山岳信仰縁の地・白山信仰など―と目される土台の上に、天の川を連想させる地名の存在に加え、水や七夕に関する古くからの民俗的な要素（七夕と相撲の関連など）が幾重にも重なり合って形成されていったと思われる。古層の片鱗が見え隠れするところに特徴がある。

「現代文明から外れていたから残ってきた」という村人の言葉に込められている通り、伝説と民俗的伝承は山峡にある地だからこそその古俗が温存され、時を越えて継承されていったのだろう。

伝説の現在を見ると、その主人公は「自在女さん」と呼ばれ、祭礼行事や人の間に生きていることが聞取り等からわかる。それらを元に当伝説を地元の人が信じて語り継いでいる、その精神的素地とは何であるのかを考察したい。これらは相互につながっていると思われ、関連づけながらまとめる。

柳田國男は「流され王」のなかで、このような話のあるのは何かそう誤伝せられるだけの事情があると考える必要があった、と述べる。その例として長門秋吉村の百済国王、佐渡常陸の新羅王、若狭遠敷郡の異国の「王ざまの人」をあげる。そして、能ふべくは神を歴史上の實在の人と考えたいのが近世の一般の人の傾向であった、とも、また対岸が三韓であった地方には、自然に新羅王百済王等の名前が宣託のなかにも出て来ることになったのではないか[45]とし、「靈威の最も旺盛なる神が突如として顕はれ崇る場合に、これを遠い國から移り臨みたまふものと考へる傾向が、大昔から我々の中にあった[46]」と説いている。

また「うつぼ舟の話」で、特に国外からはるかな海を渡って漂着した伝説の数々について、「海国に住む民[47]の、數千年にわたって馴らされたる一つの考へ方が、働いていたものと見るの他は無い[48]」と記している。

柳田の論から考えると、霊威ある高貴な異国の女性を三韓の国の王女としたこの貴種流離譚には、当地の地域性がかかわっている。日本海の人々は眼前にある日本海を、隔てる海ではなく開かれた海であると意識してきた。それはO氏の語り、「潮の流れで人がこちらに流れて着きますから。…日本海に住んでいる人は自分たちの住んでいる所こそ表日本だと思っている」という言に表わされている。

日本海地域と太平洋沿岸地域とは、海に対する感覚に異なりがある。浅香年木は日本海側と太平洋側それぞれの地域のそれを比較して次のように記す。「日本海地域にあっては、海の彼方は疑いなく人の住む世界であり、確実に往来できるものと意識されていた。（中略）紀伊の南に補陀落（ふだらく）浄土を求めて（今昔物語集巻十三―三四）、海の彼方を此世ならぬ世界と見なしていたと伝える太平洋沿岸域とは、まさに対照的である[49]」。日本海と大陸との間は太平洋と比べて人の往来がより可能な距離であり、北ツ海と呼ばれるように対馬海流やリマン海流によって、海の道では人や物資の移動が重ねられてきた。

歴史上での交渉には、五七〇／五七三／五七四年の高句麗使節による越への海岸着岸（日本書紀）、八～一〇世紀における渤海史来着が越前加賀若狭に限っても七回という史実がある。その他新羅と国交を閉ざしていた時期、日本海での私貿易は行われていた[50]。また日本への渡来の波には四段階があり、そのうち大きなうねりを示すのは七世紀後半で、百済が唐・新羅によって滅ぼされ、その前後に大量の渡来が見られる[51]、という。国情の変化時に国外に逃れた人々は相当の数になると思われ、ボートピープル的な存在も多々あったと推測する。

命がけで渡海した渡来の人々には上記の他に、嵐に会い漂流漂着した例、また人質や、戦争のために海を渡ってきた人々の伝説[52]など、史実のみならず伝承においてもさまざまな例が見られ、文書には残らない幾多の人々の移動や接触の痕跡が認められる。

日本海地域にはそのような歴史の積み重ねが横たわっている。対岸はまさにこの世の世界であり、そこに異なった国々がある、と受け取っていた人々には、その認識や異国の人との接触の記憶が醸成されている。その醸成こそが王女流離の伝説を抵抗なく受け入れ、語り継がせていった精神的素地だと言えるだろう。千合谷での湧水発見、病人治癒、土地開発に伴う稲作伝授などは、人々に喜びとともに不思議で強烈な霊威を感じさせたに違いない。地域の人々が対岸の国の王女とその不思議な出来事を結びつけ、史実を越えてこの伝説を語り継いでいったのは、外来の人々より受けた生命・生活にかかわる恩恵の深さと、日本海域の人々に潜む先述したような素地が背景にあると考える。

O氏は「文化の通り道」と述べているが、この伝説に込められているのは、繰り返し海を越えてやって来た人々の存在と、そのなかで進んだ文化や技術を有した人々が地元民と接触、混住しながら内陸へと進んでいった足跡では、と推測する。伝説のなかでの主な内

容が村落共同体、人間の存続にかかわる水系の発見や疾病の治癒であることからも、当伝説の特徴は渡来人が優れた文化や技術などをもたらした、という言説の典型であり、それは彼らが幾度となく海を越えてこの地域に辿りつき、先進的な働きや貢献をもって郷民に受け容れられてきた歴史の出来事の反映であるといえるだろう。

解雷ヶ清水の祭礼は村の平安な存在を願う確認の場でもあり、土地と地元の人々の支えともなってきた。この千合谷町は二〇一五年九月十五日現在、幼稚園児も小学生もゼロであるという。[33] 長く継がれてきたこの伝承や行事が次世代につながっていくことを望みたい。

附記

本研究にあたり、白山地区の皆さまには、聞取り調査や祭礼時等に多大なご協力を賜りました。また白山神社の小泉命様、米ノの中橋英治様からは貴重な資料の御提供やご説明を授かりました。記して皆々様に厚く御礼申し上げます。

註

(1) 呼び方は「じざいめ／じょ／ひめ」などがあるが、地元の人の呼称にしたがった。

(2) 生まれた土地の守護神のことで、産土（うぶすな）とは人の出生地のことである（福田アジオ他編『日本民俗辞典』吉川弘文館、二〇〇六年）。

(3) 白山村誌刊行会『白山村誌』（白山地区公民館、一九七八年）五八～五九頁。

(4) 柳田國男「うつぼ舟の話」（『定本柳田國男集 九』筑摩書房、一九六九［一九二五］年）。

(5) 福田晃編『日本伝説体系 十二』（みずうみ書房、一九八二年）。

(6) 荒木博之編『日本伝説体系 十三』（みずうみ書房、一九八七年）。

(7) 註（3）五九頁。

(8) 『丹生郡誌』（臨川書店、一九八六［一九〇九］年）二二七～二二九頁。「」内は筆者が記述を要約。

(9) 杉原丈夫編「貴女流離」（『若越民話の世界』福井県郷土史懇談会、一九七六年、三頁）。筆者傍線。

(10) 杉原丈夫編『越前若狭の伝説』（松見文庫、一九七〇年）五頁。

(11) 武生市白山公民館『山干飯のくらし』（武生市白山公民館、一九八一年）。

(12) 地図一参照。

(13) 二〇〇六年に「ふくいのおいしい水」に認定された。

(14) 註（3）五～三六頁。

(15) 碑の裏側に「平成八年（一九九六）七月七日解雷ヶ清水一千四百年祭」との記載。

(16) 角川地名大辞典編纂委員会『角川地名大辞典』（角川書店、一九八九年）。

(17) 筆者訳。文中の□空白は筆者によるもので表記不可の漢字。

(18) 杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書 上』（松見文庫、一九七一年）二九頁。本文は六十頁／六二頁。

(19) 杉原丈夫編『越前若狭地誌叢書 続』（松見文庫、一九七七年）七五八頁。本文は七九三～七九四頁。

(20) 井上翼章『越前国名蹟考』（二書房、一九〇三［一八一五］年）。本文は二八二～二八四頁。

(21) 渡辺市太郎『若越宝鑑』（歴史図書社、一九七三［一八七二］年）二一三～二一四頁。

(22) 鯖江女子師範学校編『福井県の伝説』（鯖江女子師範学校郷土研究部、

一九三六年）四二八～四二九頁。

（23）註（3）五〇四～五〇五頁。

（24）白山地区の北約一六キロメートルに大師ゆかりの越智山があり、山岳信仰の原型が眠る地とある。（http://fukui100kei.dogaclip.com/kanko/Profile-100000100.html二〇一五年一〇月二二日　取得）

（25）後者の相撲は本来神事と関係が深く、水の精霊がそれを好む（民俗学研究所編『民俗学辞典』（東京堂出版、一九五一年）といい、年占い、地鎮、雨乞いにも用いられた（福田アジオ他編『日本民俗辞典』吉川弘文館、二〇〇六年）。『続日本紀』天平七月七日条に聖武天皇が相撲をご覧になったと記されており、七夕と相撲の古俗を残している点で興味深い。他に山田知子『相撲の民俗史』（東京書籍、一九九六年）、平林章仁『七夕と相撲の古代史』（白水社、一九九八年）を参照。

（26）【文献四】参照。泰澄大師開基の石川県「白山神社」の祭神に菊理媛命が祀られ、媛は養蚕の神つまり織姫ともとられる。

（27）この時点での世帯数は二二世帯（白山出張所。二〇一二年七月二七日）。

（28）以上お二人の年齢については不問。男性七〇歳後半、女性五〇歳代か。

（29）註（3）七一五頁。

（30）註（3）三六頁。

（31）二〇一三年七月六日聞取り。その後神輿は平成元年に復活した。

（32）中橋鉄治『越前海岸と異国船』（私資料、二〇一三年）。

（33）越前町史編纂員会編『越前町史』（越前町役場、一九七七年）四四頁。

（34）註（3）三五頁。

（35）註（3）三六頁。

（36）今立は越前市の東側に位置し、男大迹（おほど）大王（継体天皇）の居住地として伝えられる。

（37）さらに今立地区の北側（鯖江市東部）には漆器生産地がある。

（38）『福井新聞』「渡海伝説　福井の海岸を行く」一九九七年七月十五日朝刊。

（39）市の簡易水道の水源地でもあるため。

（40）解雷ヶ清水の水管理に関して「用水山寄付連印状」が残っている。一七二九年、二階堂の長百姓がこの用水山を村に寄付し、その時用水地の村管理徹底、水場岩山の売買・改変禁止など、灌漑用の水源を守るために、その取り決めと申し送りを村中連判して誓った文書である（註（3）一四三頁）。

（41）民俗学研究所編『民俗学辞典』（東京堂出版、一九五一年）。

（42）福田アジオ他編『日本民俗辞典』（吉川弘文堂、二〇〇六年）。

（43）折口信夫「たなばたと盆祭りと」『古代研究Ⅱ―祝詞の発生』（中央公論社、二〇〇三［一九二九］年）二一一～二一六頁。

（44）山田知子『相撲の民俗史』（東京書籍、一九九六年）四七～四九頁。

（45）柳田國男「流され王」（『定本柳田國男集　五』筑摩書房、一九六八［一九四〇］年）二五九～二六二頁。

（46）註（45）二五九頁。

（47）筆者傍線。

（48）柳田國男「うつぼ舟の話」（『定本柳田國男集　九』筑摩書房、一九六九［一九二五］年）一七三頁。

（49）浅香年木「日本社会における日本海地域」（網野善彦ほか編『日本の社会史　第一巻』岩波書店、一九八七年）二九三頁。

（50）門脇貞二『日本海域の古代史』（東京大学出版会、一九八六年）九三頁。

（51）上田正昭『帰化人』（中央公論社、一九六五年）二五頁。

（52）塩瀬博子「敦賀市五幡の『蒙古来攻伝説』」（『口承文芸研究』第三八号、二〇一五年）一六八～一八四頁。

（53）白山出張所への聞取り。若い年齢層は地域外居住とのこと。